

「子ども」というもの

— 児童文学による「子ども」への接近 —



本 田 和 子

— 稚児を見よ。其目の清しきはみ空の星の如く、其頬のふくよかに麗はしきは、なべての花にも木の実にも劣らず。物見るに怖れといふものを知らず、泣くにも笑むにもわが心のまゝにて、欲しと思ふ物あれば手をさしのぶるに誰憚ることなし。神の如き無邪気とは之なるべし。

石川啄木「一握の砂（感想）」より—

子どもの存在は、人間が生き続けるために欠くことのできないものであった。子どもを、「生命」や「成長」の象徴ととらえて、そこに生きる望みを託そうとする人間の姿は、その歴史の中に姿を変え、よそおいを新たにしてい、くり返し現われている。

自らの肉と血によってつくられた「子ども」の誕生は、「死と滅び」に向かう個人の歩みの中で、まさに「よみがえり、再生」としてとらえられる望みに充ちた出来事であったろう。老いに向かう自らの肉身は、いつか消え去る日を訪れようと、自らの生命を伝える存在は、もう新しい肉と霊をもつて、この世に息づいている。その喜びにささえられて、人類はきびしい生を戦い続けてきたといえるのではないか。

とりわけ、文学にたずさわる人々、特に児童文学者とよばれる人々にとって、子どもの存在はまさに生の源泉そのものであった。

児童文学者にとって、子どもは二重の意味で、その生を

ささえるものとなっている。その一は、人類一般の願いと共通の基盤に立つものであり、今一つは、子どもによって見いだした「真の生」を、「言葉と文字」を借りて形象化することによって、自己を表現し、自らの生をより確かなものにしていくという意味である。

児童文学の作り手たちは、一般にいわれるような意味での「子どもの研究者」ではない。したがって、作家たちのすべてが、子どもを理解しようとする努力しているとか、あるいは、その発達と教育を真剣に志向しているなどと、断言することはできない。しかし、作家たちがその直感力に依存して子どもをとらえたその筆は、意外な確かさで子どもの生きる姿を浮き彫りにしている。それは、「内なるかわき」に促され、おのれの全存在をかけてなされた「子どもへの接近」によって、はからずもたらされた成果とみることでできよう。

そのゆえに、児童文学は、文化財として子どもの生活に位置づくのみでなく、「子どもの生きる姿を伝えるもの」「子どもとおとなのかわり合いを反映するもの」としての役割を、になうことになる。私も、作品を通して「子どもにとって子どもとは何か」ということ、および「おとな

にとって子どもとはどんな存在であるのか」ということを、問い直していくことができよう。

ここでは、二、三の作品を手がかりとしながら、この問題を考えていくこととする。

◆「ピーター・パン」と仲間たち

——おとぎの国とひと口に言っても、いろんなおとぎの国があります。たとえば、ジョンのおとぎの国には、湖があつて、その上を紅ヅルがとんでいます。ジョンは、その紅ヅルをねらつて、矢をい入るのです。ところが、まだとても小さいマイケルのおとぎの国は、紅ヅルがあつて、その上を湖がとんでいるのです。——J・M・バリ、厨川圭子訳

「ピーター・パン」岩波書店より——

作者バリの「幼い日への飢え」は、永遠に育つことのない主人公ピーターを生み出し、「子どもだけが入国を許される不思議な王国」や、「子ども時代にのみ訪れる生の喜び」を作品の中に描き上げた。二十世紀初頭の英国が生み出したこの物語は、作品の真価は別として「幼い日への飢え」を満たすものとして、異常なまでの人気にささえられ、世界中にその仲間を広げていった。

「ピーター・パン」の支持者たちは、大別して二つのグループに分けることができる。

一つの群れは、ウエンディやマイケルと共に「おとぎの国」を訪れ、海賊フックとの戦いや人魚の湖での冒険に心をおどらせる「子どもの読者」と、読者である子どもの喜ぶものを共に喜ぶおとなたち」であり、他の一つは、「自由と喜びにあふれた幼い日への憧憬」を、作品の中で満たそうとするおとなたちである。

前者にとって、作品の魅力は、ピーターの奇抜なふるまいや勇敢さであり、妖精ティンクのいたずらや海賊フックの荒々しさと間抜けさ、あるいは時計を飲みこんだためクタクと時を刻み続けるわになどである。そして何よりも、おとぎの島で繰り広げられる子どもたちと海賊とインディアンとわたとの、スリリングな戦いである。しかし、後者にとっては、それらにもまして心を打たれる部分がある。

それは、「子ども」および「子どもの心の世界」について、作者が語る細々としたことだからなのである。先に引用した「子どもは一人々々、その子なりの王国を持っている」という一節もその例である。

作品の中には、ピーターの他にも大勢の子どもたちが登

場する。寝室の窓からとび出して、「おとぎの島」にやってくるウエンディらの三人姉弟や、公園で迷子になって島へ送られてきた数名の男の子などである。それらの子ども群れの中にいて、ピーターは、常に他と異なるユニークさで描かれる。

——ピーターは三人なんかより、よっぽど早くとべるので、冒険をしに、いきなりどこかへ消えてなくなる場合があります。みんなは仲間に入れてもらえないのです。ピーターは、星ととてもなくこっけいな話でもしていたのか、笑いながら、降りてくることができました。でも、その話が何だったのか、もう忘れているのです。かと思うと、人魚のうるこを、まだからだにくっつけたまま、あがってくることもありました。そのくせ、いったいどんなことがあったのか、はつきりと報告することができないのです。

——前掲書より——

現在の瞬間に全存在をかけて行為するピーター、そして、その自分の瞬間的な生活行為のあれこれを、言葉のレベルに抽象化し、過去の次元に配列し直して、他人にわかるように報告することなど決してできないピーターの姿は、現在に滞在して感覚と運動に生きる子どもの姿の象徴でもある。

——ピーターは、なんでも思い立ちます。「スライトリー、医者をつれてこい。」

「かしこまりました」と、とっさに答えて、頭をかきかき、むこうへゆきました。でも、ピーターのいいつけには、したがわなくてはなりません。ジョンの帽子をかぶり、もったいぶった顔をして、すぐもどってきました。

「あの、もし、お医者さまでしょうか？」と、ピーターは、スライトリーに近づきながら、ききました。

こんな時に、ピーターとほかの子どものちがうところは、みんなは「うそっこ」だということを知っていますが、ピーターにとっては、「うそっこ」と「ほんもの」とは、まったくおなじなのです。これが時々、みんなを閉口させるのです。

——前掲書より——

「うそっこ」とは、想像上の状況に展開される遊戯行為であり、「ほんもの」とは現実の生活行為である。作者は、遊戯行為に生きる姿を子どもの典型ととらえ、それをピーターに託したのである。

——今度の遊びというのは、冒険をしないふりをするのです。ジョンやマイケルが普すつとしていたようなことを、

するのです。腰かけにすわって、空中にボールを投げたり、おしっくらしたり、散歩にでも、灰色グマ一匹すら殺さずに、もどってきたりするのです。ピーターが腰かけにすわって、何もしないでいるのは、なかなかの見ものでした。そんな時、ピーターは、もったいぶった顔をしなひではいられません。じつとすわっているなんて、ピーターにとっては、まったく、こっけいじみていたのです。

——前掲書より——

子どもにとって、「冒険をしない」ということは大変な「冒険」である。おとなを驚かせうるたえさせるような、常識のわくを越えたことからこそ、子どもの日常性なのである。おとなの要求する「無難で常識的な生活」は、灰色グマを殺すこと以上に困難であり、珍しいことなのである。

ピーターは冒険に生き甲斐を感じている。海賊フックとの命がけの一騎討ちで、彼が感じたのは、まじりつけのない喜び、ただそれだけであった。しかし、そのピーターが、気も遠くなるほどの混乱と恐れに立ちすくむ場面がある。

——その時、ピーターは、自分がフックより岩の高いところに立っているのに気がついて、これでは、正々堂々と戦ったことにならない、と思って、フックを助けようとして、

片手をのばしました。

その時です。フックは、ピーターをかみました。

その痛みのためというより、フックの不当なおこないに、ピーターは、めまいを覚えました。どうしたらいいのか、わからなくなっていました。ピーターはただ、おそろしそうに、じっとフックを見つめているだけでした。どの子でも、はじめて不当な扱いをされた時、こんなふうに心が傷つくものです。子どもが親しげに、相手に近よっていた時、子どもは、相手から当然正当な扱いだけをうけるものと、期待しているのです。

——前掲書より——

子どもたちはいつも、周囲から正しく扱われることを望んでいる。子どもの論理の道すじは一本で真すぐに延びている。ピーターは、自身の騎士的な振舞に対して、フックがずるがしく邪悪な敵意で報いようとは、想像すらできなかった。なぜ、フックは自分にかみついたのか、鉄のかぎは、なぜ自分を傷つけるのか。茫然とたたずむピーターの姿には、人間の「裏切り」に出会って、驚きおののく子どもの心が象徴されている。

こうして、バリは、ピーターを通して「子どもの中の最

も子どものなもの」をできるかぎり描き出そうと試みた。それは、「成長の過程で、加速度的に失われていく人間の純粋性」といいかえることもできよう。

そして、彼は、子どもの本質を究極的には「無垢の信じる心」におこうとしている。

——「だからね」とピーターは、しんせつに話をつづけます。「どの男の子にも、女の子にも、ひとりずつ妖精がいるべきなんだよ。」「いるべきですって？ じゃ、ほんとうはいないの？」

「いないんだ。このごろの子どもって、いろんなことを知ってるだろう、すぐ妖精のことなんか信じなくなっちゃうんだ。そして、子どもが『妖精なんて、信じないや』って言うたびに、どこかで、妖精がぶったおれて、死んじやうのさ。」

——前掲書より——

妖精は子どもらの「信じる心」の所産であり、その存在を信じる者にとってのみ、実在である。

——ティンクの声があんまり小さいので、はじめのうちは、何を言っているのか、わかりませんでした。が、やっと、わかりました。もしも子どもたちが妖精を信じるなら、きつ

とまた、もと通り元気になると思う、と言ったのです。

ピーターは、さっと両手をのぼして、呼びかけました。

そこには、ひとりも子どもがいませんし、しかも夜中でした。

けれどピーターは、今、「おとぎの国」の夢を見ている

かもしれない子どもたち、それだから、みなさんが考える

よりか、ずっとピーターの近くににいるかもしれない子ども

たち、ぜんぶに向かって、呼びかけました。――

――「もしみなさんが信じるなら、手をたたいてください。

ティンクを死なさないでください」と、ピーターは、子ども

もたちに大声で呼びかけました。

大ぜいの子が手をたたきました。

――前掲書より――

英国の恒例のクリスマス公演においても、舞台の端に立ったピーター役者が客席に手をのべて呼びかけると、客席からは拍手のうずがわき起こるといわれている。

作者バリは、素ばくたるおとなの生の中で、満たされることのないかわきを、「幼い時代をうたい上げること」でいやそうとした。その結果、作品は、郷愁と憧憬と、そして

感傷の文学となり、児童文学としての評価はその感傷性のゆえに、必ずしも高いとはいえない。事実、この作品をさ

さえ、広めたのはおとなたちであった。おとなたちがこの作品に寄せた熱い思いは、「おとなにとって子どもとはどういう存在なのか」という問いに対して、一つの答えを示してくれるものとなる。

子どもが、果たして「純粹」であり「無垢」であるか否かはここでは問うまい。少なくとも、その最も子どもの的なところ、たとえば「現在の瞬間に生き、いきいきと動き廻る存在であり、常に善意を期待している」などの特色のゆえに、そして、何よりもその「見えぬものを信じる心」のゆえに、おとなの救いであり、導きの星だったのであった。

◆「ナルニヤ国」の子どもたち

アダムとイブの末なる人間の子どもたちが、偉大なライオンのアスランによって作られた神秘の国ナルニアで、その創造の時からさまざまな冒険に遭遇し、遂にはその滅亡にまで立ち会う壮大な物語全七巻が、英国の神学者C・S・ルイスによって世に贈られた。一九五〇年から七年間にわたる出来事である。

ナルニアは、この地上ではないどこかにある「別の世界」であり、「この世の空間をどこまで進んでいっても決してい

きつくことのない」世界なのである。この世界とは異なる時間の下に生成し、この宇宙とは異なる空間の中に成立する国である。

そして、その幻想の国は、そこを訪れた子どもたちにとっては、「ナルニアこそまことの生の場所」であり、そこでこそ「本ものの、自分としての生活」の許される世界であった。子どもたちがナルニアに滞在する時、現実の世界の時間は一秒も経過しないが、逆に、子どもたちがこちらの世界で暮らしている時、ナルニアの時間はナルニア流の時間を刻んでいる。こちらの世界で一年が経過した時、ナルニアでは数世紀の歴史が流れていたりする。子どもたちにとっては、ナルニアこそ「実在の国」であり、この世は自分たちが直接触れていなければその存在すら確かではない。幻の国である。

しかし、そのナルニアへは、子どもたちの意志だけで到達することができない。ナルニアにとって、人間の子どもの協力が必要な時にのみ、偉大なライオンのアスランの召しによって、そこに呼びよせられるのである。衣装だんすの中を通ったり、壁にかかった絵の中にとびこんだり、その通路はさまざまであるが、いずれも、子どもたちの予期

していないときに、思いがけない方法で、ナルニアに到着しているのであった。

最初の物語「魔術師のおい」に登場するアンドルーおじは、自分の研究した魔術によって「別の世界」への脱出を試みる。そして、魔法の指輪によってこの世界を抜け出した子どもたちは、「この世ではないところ」に到着する。そこは「世界と世界のあいだの林」であり、どこの世界にも属さず何事も起こらない。限りなく平和で、限りなく静かで、まどろむしかない世界である。アンドルーおじの魔法によって到達したこの場所は、人間の知恵と力の限界を示している。すなわち、人間の力で到達できるのは「あいだの林」までであり、「本当の別の世界」に到達するためには、今一つ、別の意志・別の力が必要なのである。

人間はすべて生きとし生ける者の王たるべくさだめられ、ナルニアの王座も、アダムとイブの末によって占められる運命にある。人間は、すべての者にまさる知恵をもち、王者たるべき力をもつが、その知恵と力は、より大いなる意志によって方向づけられる時にのみ、よりよく発揮されるのである。

ところで、この大いなる意志との出会いはどのようにし

てなされるのであろうか。作者ルイスは、それを人間、特に子どもの中にある「よりのむ心」によってなされるとしている。物語の中で自分以外の、あらゆるものを信じることをやめてしまった小人たちには、青空も光も見えなくなり、アスランの姿もそのかぐわしいぶきも感ずることのできない。ただ、疑いと不満の薄暗がりの中に、地面を見つめてうずくまり続ける。

人間の子どもたちの中で、常にいち早く、アスランの姿を見いだし、その導きに従おうとするのは、いつも年下の子どもである。たとえば、ピーターたち四人が峡谷の中で道を見失ったとき、幼い妹のルーシーは、ちらりと光ったアスランの影を誰よりも早く認め、迷うことなく、道をそちらに選ぼうとした。しかし、他の兄弟たちの反対でそれを果たさず、道に迷ったまま野宿する。一眠りしたルーシーは、自分の名前を呼ぶかすかな声に目を覚まさせられる。誰の声か思い出せないが、この世で一番なつかしい、一番好きな人の声である。ルーシーは恐れ気もなく、一人で深夜の森にわけ入り、「大好きなアスラン」に出会うのである。疑うことも感ずることもしない「よりのむ心」がそこに描かれている。

ナルニアは、「幼な子の如くあらずんば入ることを得ない」国である。子どもたちは、成長と共に、ナルニアを訪れる権利を失っていく。まず、ピーターとスーザンが、やがてエドマンドもルーシーまでも、「もはや年をとりすぎ、自分たちの世界によくなじんで暮していかねばならない」として、ナルニアを訪れる機会を失っていく。おとなになるということは、神秘の国を失うことなのであった。

魔法は、「よりのむもの、信じるもの」にのみ働く」という原則をもち、ファンタジーの世界はこの原則の上に成り立っている。「ピーター・パン」も「メアリー・ポピンズ」も、すべて幼い子どものみが入国を許された幻想の国で物語が展開し、子どもたちがおとなになった時、それらの世界は姿を消していくのである。「天国へはいる」ことができ、「神を見る」ことを許された幼い魂は、また、「魔法を信じ」「ファンタジーの国の住人たり得る」資格の所有者でもあるのだ。

作者ルイスが、人間の中に求めたのは、この「よりのむ心」だったのでないか。そして「よりのむ心の持ち主」の典型として立ち現われたのが、「子どもという人間」だったのである。ルイスは、子どもの中に人間の原型を見

いだし、子どもを描くことによって、最も根源的な人のあり方を写し出そうとしたのではなかったか。

ルイスの立場は、「子どもに何かを伝える」とか、「子どものためによい材料を提供する」というところからは遠い。彼自らの語るところによれば、澎湃とわき上がるイメージの群れが、次々とまとまって、連作の筆をとらずにはいられなかった。その結果、作者の全存在を貫く強い信仰と、全存在をかけてなされる人間への求めとが、自ら基調となつてイメージの流れを導き、かくも壮麗なファンタジーの世界が作り上げられたのである。

作者にとって、子どもおよびそのかわる世界は、描かずにいられない人間の「真の生の姿」であつた。まことの生もまことの死も、永遠の未来も、子どもの姿を借りるときにのみ、最もよくその形を現わすことができたのである。物語の最後は、ナルニアと関係し、ナルニアを愛したすべての人々の「死」によつて終わっている。すなわち、成長のゆえに、再びナルニアを訪れる資格を失つたポーリーやディゴリー、あるいはピーターたち四人の兄弟姉妹が、現実の世界で「死」に遭遇することによつて、「まことのナルニア」で「永遠の生」を得るのである。

ルイスも、バリやその他の英国の作家たちの例にもれず、「子ども時代」に永遠の憧憬をよせ、そこに「生の源泉」を見いだした一人なのであろう。「子ども時代」は、おとなにとつて「失われた世界」であり「再びもどらぬ時間」である。この「子ども時代」の回復のために、現実の時間を超えた「別の時間」と、滅亡したナルニアに代る「まことのナルニア」が設定され、そこでは、すべてのよき人々が「永遠の生」を得るとしたのではないか。

子どもこそ「よりのむ心」のままに、生きとし生けるもののすべてと手を組み合つて、喜びにあふれて生きていく存在である。子どもたちが、「もの言うけものや木々」と共に、「自分らしく」生活できるナルニアは、すべての人間にとつて「まことの生の場所」なのである。

——彼らはどんな目にあつても心の明るさは失わない。この世に生きている彼らの使命は、この世にふたたび信仰と希望をもたらすことである。もしも人間の精神が、この自信に満ちた若い力によつていつもよみがえらされることになかったなら、いったい、どうなつていたのであろうか。

——ポール・アザール、矢崎・横山訳「本・子ども・大人」——

（お茶の水女子大学）